

八尾市文化財調査報告47
平成11~13年度公共事業

八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅱ

2002年3月

八尾市教育委員会



八尾市文化財調査報告47 正誤表

頁・行	正	誤
11頁 第9図 1区地層	6層 5Y6/1 灰色シルト混粘土	6層 灰色シルト混粘土
12頁 第10図 6区地層（文字追加）	A 10Y5/1 灰色シルト混粘土	
17頁 出土遺物観察表 遺物番号12	格子目タタキのちハケ。	格子目タタキのち。
報告書抄録 副書名	平成11～13年度公共事業	平成12・13年度公共事業

はじめに

八尾市は、大阪府のほぼ中央部に位置し、生駒山地の山麓部から西に広がる大阪平野の東部にかけての範囲を有しています。当市域の平野部は、古くは河内湾、河内湖、河内潟に面し大和川をはじめとする多くの河川によって肥沃な土壤が形成されており、縄文時代から連続と遺跡が存在しています。また、生駒山地の山麓部や羽曳野丘陵上には旧石器時代から連綿と遺跡が存在しており、当市は遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書には八尾市の公共事業に先立つ遺構確認調査の成果の一部を収めております。

今後八尾市内の貴重な埋蔵文化財が市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれる形で、保存・活用していくことが、重要な課題となっていくことでしょう。本書が微力ながらもその役割の一端を担うことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが調査にご協力、ご助力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

八尾市教育委員会

教育長 森 卓

例　　言

1. 本書は、八尾市教育委員会が平成11～13年度に公共事業に伴い、八尾市内で実施した造構確認調査・立会調査の報告書である。
2. 調査は、八尾市教育委員会生涯学習部文化財課が実施した。
3. 調査は、八尾市教育委員会生涯学習部文化財課技師　米田敏幸、道斎、吉田野乃、藤井淳弘、吉田珠己、西村公助が担当した。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査の概要を収録した。
5. 本書の作成にあたっては、吉田野乃、西村公助が執筆を行った。文責はそれぞれ文末に記している。
6. 調査一覧表と抄録の作成及び本書の編集は西村公助がおこなった。

本文目次

1. 史跡心合寺山古墳 新池堤体改修工事に伴う立会調査（平成11年度）	1
2. 史跡心合寺山古墳 新池堤体改修工事に伴う立会調査（平成12年度）	4
3. 渋川廃寺遺跡（2000-364）の調査	7
調査一覧表	20

本文目次

図版一 史跡心合寺山古墳 新池堤体改修工事に伴う立会調査（平成11年度）
図版二 史跡心合寺山古墳 新池堤体改修工事に伴う立会調査（平成12年度）
図版三 渋川廃寺遺跡（2000-364）の調査
図版四 渋川廃寺遺跡（2000-364）の調査
図版五 渋川廃寺遺跡（2000-364）の調査
図版六 渋川廃寺遺跡（2000-364）の調査
図版七 渋川廃寺遺跡（2000-364）の調査
図版八 渋川廃寺遺跡（2000-364）の調査
図版九 渋川廃寺遺跡（2000-364）出土遺物
図版十 渋川廃寺遺跡（2000-364）出土遺物
図版十一 渋川廃寺遺跡（2000-364）出土遺物

1. 史跡心合寺山古墳 新池堤体改修工事に伴う立会調査（平成11年度）

- 調査地：八尾市大竹5丁目地内
- 調査期間：平成12年1月13～14日
- 調査方法

八尾市下水道部河川課により平成9年度から継続して行われている新池堤体改修工事に伴い、新池現況堤体西側の内側法面の56.77m分について、法面の腐食土除去後の土層確認及び遺物の採集を行った。新池堤体については、平安時代末以降に築堤されたものであることが、これまでの調査でわかっている。

4. 調査概要

腐横土の削平上端部分（TP+29.2～28.8m前後）から地表下0.4～0.6m（T.P.+29.1～28.6m）以下で旧堤体構成層とみられる淡黄灰茶色砂質土層（暗灰色粘土ブロック混、3層）、淡灰色小砾混砂質土層（暗灰色粘土・黄灰色粘土 織状ブロック混、4層）、灰黄色小砾混砂層（5層）を確認した。3層から埴輪片、4層から埴輪とみられる小片、平瓦片、5層から埴輪片、瓦器範片、土師器羽釜口縁部片が出土した。5層から出土した瓦器範片は摩滅が著しいが、暗文が密なものであり、土師器羽釜口縁部片は小片であり確定できないが、口縁部の形状から11世紀後半から12世紀代にかけての所産である可能性がある。また腐食土除去時の廃土および表面採集により、心合寺関連とみられる瓦片を確認した。ほとんどが平瓦片であったが、複弁八葉蓮華文軒丸瓦片（図版1）を1点確認した。これは瓦当面が1/3強残っているもので、周縁は幅広で中房に進子がみられる。清原得巖氏採集資料（注1）に類例がある。奈良時代の所産とみられる。今回の調査地では、織状や単塊状の粘土をブロック状に混入して人為的に盛り上げた旧堤体構成層を確認した。時期については、法面の断面精査であったため、出土層の明らかな遺物が少なく判然としないが、これまでの調査成果と矛盾しないものとみられる。

（吉田野乃）

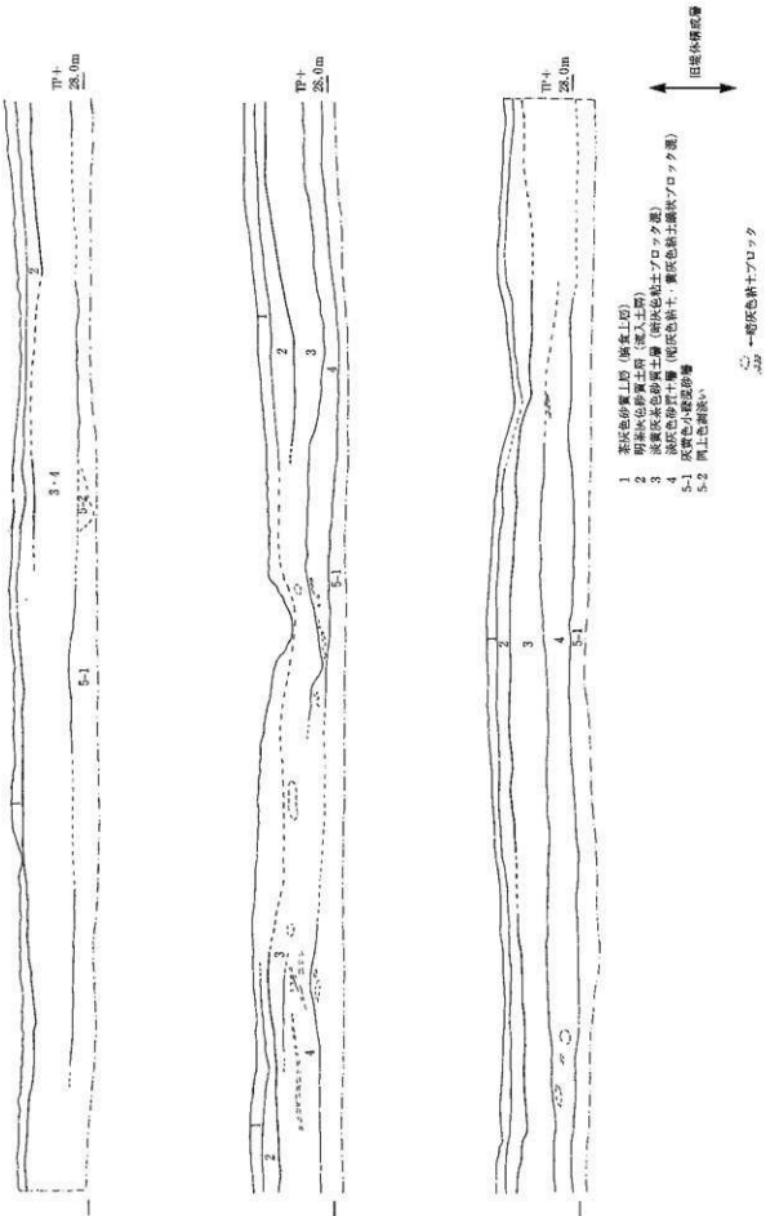
（注1）（財）大阪文化財センター「清原得巖所蔵考古資料図録」『大阪文化誌』通巻第6号 1976年



第1図 調査周辺図(1/5000)



第2図 調査区設定図 ($S = 1/400$)



第3図 調査地土層断面図 ($S = 1/80$)

2. 史跡心合寺山古墳 新池堤体改修工事に伴う立会調査（平成12年度）

1. 調査地：八尾市大竹5丁目地内

2. 調査期間：平成13年1月22日・26日

3. 調査方法

八尾市下水道部河川課により平成9年度から継続して行われている新池堤体改修工事に伴い、立会調査を行った。現況の新池堤体については、平安時代末以降に築堤されたものであることが、これまでの調査でわかっている。前年度に引き続き、新池現況堤体の北側法面23mの腐食土除去に伴う土層の確認及び遺物の採集を行った。

4. 調査概要

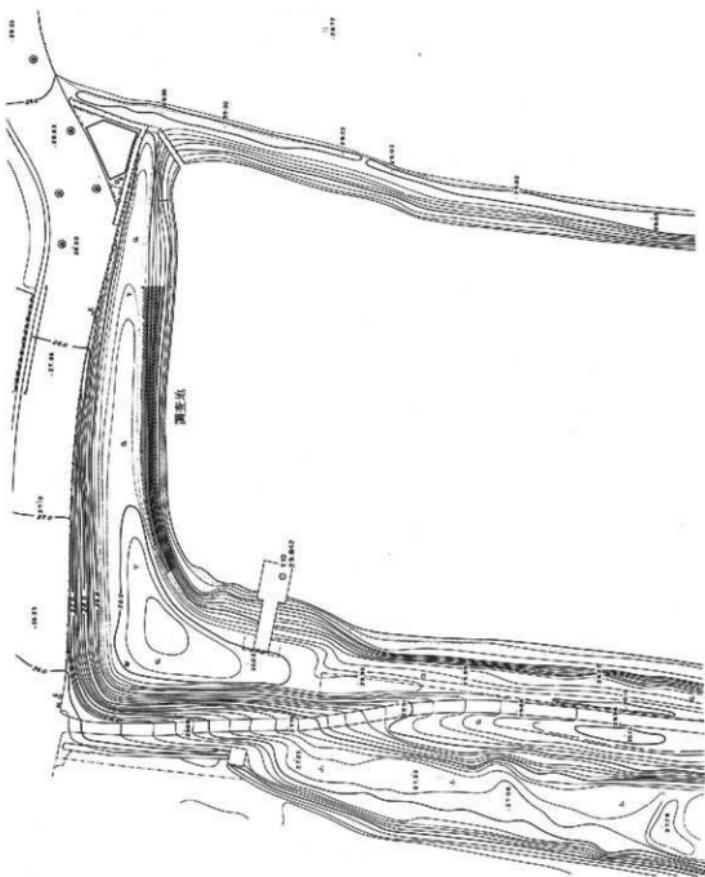
腐食土の削平上端部分（TP+29.4m前後）から地表下0.6m以下（T.P.+29.1m以下）で旧堤体構成層とみられる明灰色中疊混砂質土層（暗灰色粘土ブロック混）を確認した。腐食土層内から弥生式土器小片が、出土層は判然としないが、断面精査中に土師器小片が出土した。また腐食土除去工事の廃土中及び表面採集により、心合寺関連とみられる半瓦片を確認した。今回の調査地である新池北側堤体部分について、心合寺山古墳の東側の周濠痕跡とみられる大竹総池の北東側の形状と異なり、盾形周濠の痕跡を残していないため、その築堤時期が注意された。今回確認した旧堤体構成層については、平成11年度に確認した新池西側の旧堤体構成層と同様に、粘土をブロック状に混入して人為的に盛り上げたとみられるものである。また平成元年度に（財）八尾市文化財調査研究会により調査された新池北西隅の埴管付替工事に伴う調査（注1）では、T.P.+27.0m～29.0mの堤体構築土から中国産白磁片等が出土している。このことからこれまでの調査成果を併せて考えると、新池の現況堤体の形状は平安時代末以前後以降に形づくられたものとみられる。（吉田野乃）

（注1）原田昌則「19. 心合寺山古墳（S O89-1）」『八尾市文化財調査研究会年報平成元年度』

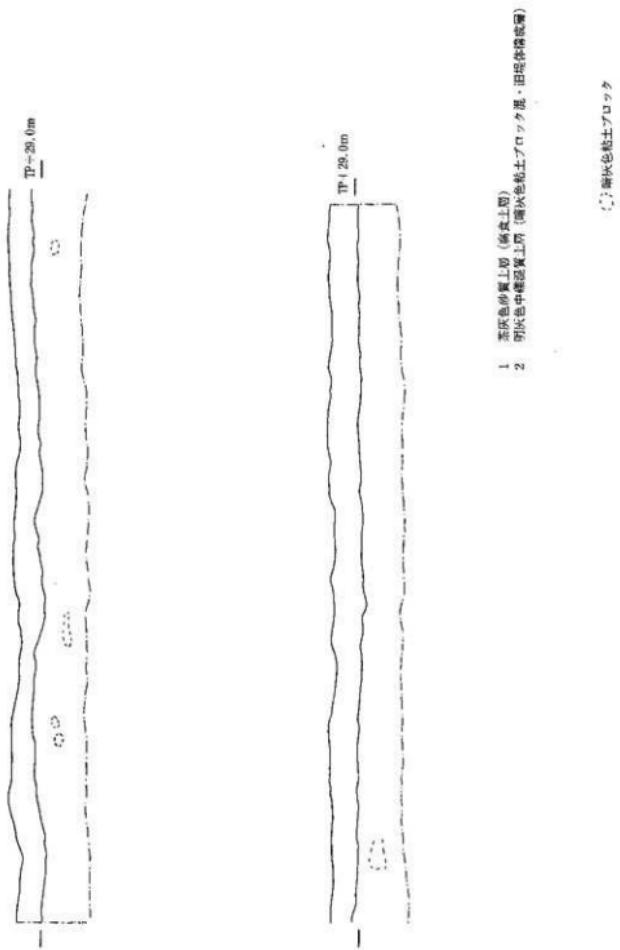
1990年



第4図 調査周辺図(S=1/5000)



第5図 調査区設定図($S = 1 / 400$)



第6図 調査地土層断面図($S = 1/80$)

3. 渋川廃寺遺跡（2000-364）の調査

- 調査地：八尾市春日町1丁目地内
- 調査期間：平成12年11月9日～平成12年11月28日
- 調査方法

都市計画道路竜華東西線建設に伴い試掘調査を行った。調査を行った場所は東西約370m、南北約7～30mの東西方向に細長い敷地で、この敷地内に5×5mの調査区を6箇所（合計面積150m²）設定した。調査区は西側から1区・・・6区と名付け、各調査区とも機械と人力を併用して調査を行った。

4. 調査概要

1区

地層

1層 盛土 層厚0.6～1.35m。現地表面の標高はT.P.+10.0mである。1-1層から1-5層に分かれると、時期差ではなく、現代の盛土である。調査区のほぼ中央には旧竜華操車場建設時のヒューム管埋設工事が行われている所があり、部分的に現地表下約2.0mまで掘削工事が行われていた。そのため調査区の中央部では本来の地層は残ってなかった。

2層 10YR3/3 暗褐色細砂混粘土 層厚0.25m前後。

3層 10YR4/4 褐色細砂混粘土 層厚0.4m前後。中世の瓦器碗の破片を少量含む。

4層 7.5YR4/3 褐色シルト混粘土 層厚0.25m前後。上面はT.P.+8.8m前後で、土壤化しており、遺構を検出した。

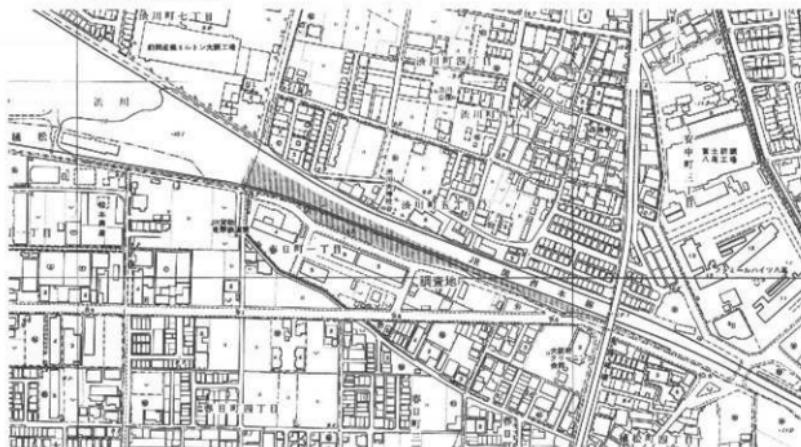
5層 10YR5/2 灰黄褐色細砂混粘土 層厚0.3m前後。平安時代の土師器、瓦の破片を含む。

6層 5Y6/1 灰色シルト混粘土 層厚0.1m前後。上面はT.P.+8.4m前後で、土壤化しており、遺構を検出した。

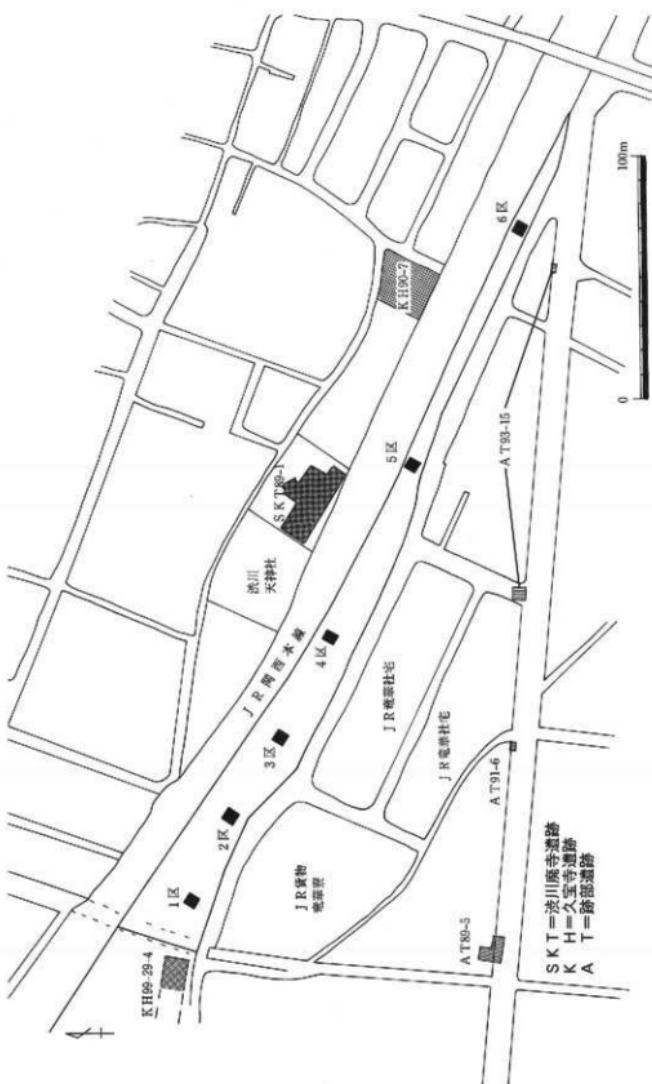
7層 5Y4/1 灰色細砂混粘土 層厚0.2m前後。

8層 10YR5/1 関灰色細砂混粘土 層厚0.3m前後。

9層 5B6/1 青灰色粗砂混細砂 層厚0.55m以上。河川の堆積と思われ、湧水がおおくあった。この砂層は財団法人八尾市文化財調査研究会調査地（久宝寺遺跡[KH99-29-4]）で確認している砂に対応する。したがって、遺物の出土はなかったがおそらく古墳時代中期頃の河川の堆積であると思われる。



第7図 調査周辺図 (S = 1 / 5000)



第8図 調査区設定図($S=1/2000$)

検出遺構

盛土（厚み約0.6~1.35m）を機械で掘削し、以下機械と人力の併用により調査を行った。

調査区には、旧の竜華操車場建設時のヒューム管埋設工事が行われている所があった。この部分については、現地表から2mまで掘削が行われていた為、本来の地層の堆積状況は確認できなかった。しかし、ヒューム管埋設工事の場所から西側には本来の地層が残っており、この部分について調査を行った。調査の結果、4層上面で土坑1基（S K101）、小穴1個（S P101）と6層上面で土坑1基（S K102）を検出した。

4層上面検出遺構

S K101は北側で検出した。遺構の北側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した幅は1.4m、深さ0.5mを測る。埋土は上から10YR5/1褐色細砂混粘土、10BG5/1青灰色粘土で、遺物の出土はなかった。

S P101は北西側で検出した。遺構の西側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した幅は0.2m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR6/1褐色細砂混粘土で、遺物の出土はなかった。S K101やS P101からは遺物の出土はなかったため、詳しい時期は不明である。しかし、検出した遺構の切り込んでいる地層は平安時代後期から鎌倉時代頃と思われ、遺構もその頃と推測できる。

6層上面検出遺構

S K102は北側で検出した。遺構の北側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した現状の幅は1.8m、深さ0.8mを測る。埋土は上から10BG5/1青灰色細砂混粘土、10BG4/1暗青灰色粘土、10BG4/1暗青灰色粗砂混粘土の3層に分かれ、最下層からは須恵器や土師器の破片が出土した。

2区

地層

1層 盛土 層厚1.2m。現地表面の標高はT.P.+10.15mである。

2-1層 5B3/1 暗青灰色粗砂混粘土 層厚0.25m前後。旧耕作土。

2-2層 5B5/1 青灰色粗砂混粘土 層厚0.1m前後。旧耕作土。

2-3層 10BG5/1 青灰色微砂混粘土 層厚0.1m前後。

3層 10YR6/1 褐色粗砂粘土（マンガン含む）層厚0.1m前後。瓦器、土師器、須恵器の破片出土。
上面 土壌化。

4層 10YR5/6 黄褐色シルト混粘土 層厚0.1m前後。

5層 10YR4/2 黄褐色細砂混粘土 層厚0.1m前後。瓦器、黒色土器の破片出土。上面土壌化。

6層 10YR5/1 褐色細砂混粘土 層厚0.25m前後。土師器、瓦の破片含む。上面はT.P.+8.4m前後で、遺構を検出した。

7層 N5/0 灰色シルト混粘土層厚0.1m前後。

8層 5B5/1 青灰色細砂混シルト 層厚0.3m前後。この砂層は西側の1区で検出した9層に対応する。
したがって、遺物の出土はなかったがおそらく古墳時代中期頃の河川内の堆積であると思われる。

検出遺構

盛土（厚み約1.2m）を機械で掘削し、以下機械と人力の併用により調査を行った。その結果、6層上面で土坑2基（S K201・S K202）を検出した。

6層上面検出遺構

S K201は北東隅で検出した。遺構の東側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した現状の幅は1.7m、深さ0.3mを測る。埋土は10BG4/1 暗青灰色細砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

S K202は南側で検出した。遺構の南側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した現状の幅は1.1m、深さ0.2mを測る。埋土はN5/0 灰色細砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

検出した遺構は、遺構内からの遺物の出土はなかったため詳しい時期は不明であるが、5層と6層内から出土している遺物から、奈良時代～平安時代頃と思われる。

3区

地層

- 1層 盛土 層厚0.9m前後。現地表面の標高はT.P.+10.0mである。
- 2層 10YR4/1 褐灰色粗砂混粘土 層厚0.15m前後。旧耕作土である。
- 3層 7.5YR4/3 暗褐色細砂混粘土 層厚0.4m前後。土師器・瓦器・瓦の破片を多く含む。
- 4層 10YR4/4 褐色細砂混粘土 層厚0.3m前後。土師器・須恵器・瓦の破片を多く含む。上面の標高はT.P.+8.7m前後で、土壤化しており、遺構を検出した。
- 5層 10YR5/6 黄褐色細砂混粘土 層厚0.2m前後。上面はT.P.+8.5m前後で、土壤化しており、遺構を検出した。
- 6層 10YR4/2 灰黄褐色細砂混粘土 層厚0.2m。
- 7層 7.5YR4/3 褐色シルト混粘土 層厚0.2m。
- 8層 2.5Y5/3 黄褐色粘土 層厚0.1m。
- 9層 5B4/1 晴青灰色シルト混粘土 層厚0.1m。
- 10層 10Y5/1 灰色シルト～細砂 層厚0.4m以上。この砂層は西側の1区や2区で検出した砂層に対応すると思われる、ことから、遺物の出土はなかったがおそらく古墳時代中期頃の河川内の堆積であると推測される。

検出遺構

盛土（厚み約0.9m前後）を機械掘削にて除去し、以下機械と人力の併用により調査を行った。調査の結果、4層上面で土坑1基（SK301）、5層上面で土坑1基（SK302）、小穴1個（SP301）を検出した。

4層上面検出遺構

SK301は北側で検出した。遺構の北側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した現状の幅は、1.35m、深さ0.25mを測る。埋土は10YR5/1褐灰色細砂混粘土で、炭化物を含んでいた。この遺構からは土師器の破片や瓦の破片が出土している。

この遺構は中世以前と思われる。

5層上面検出遺構

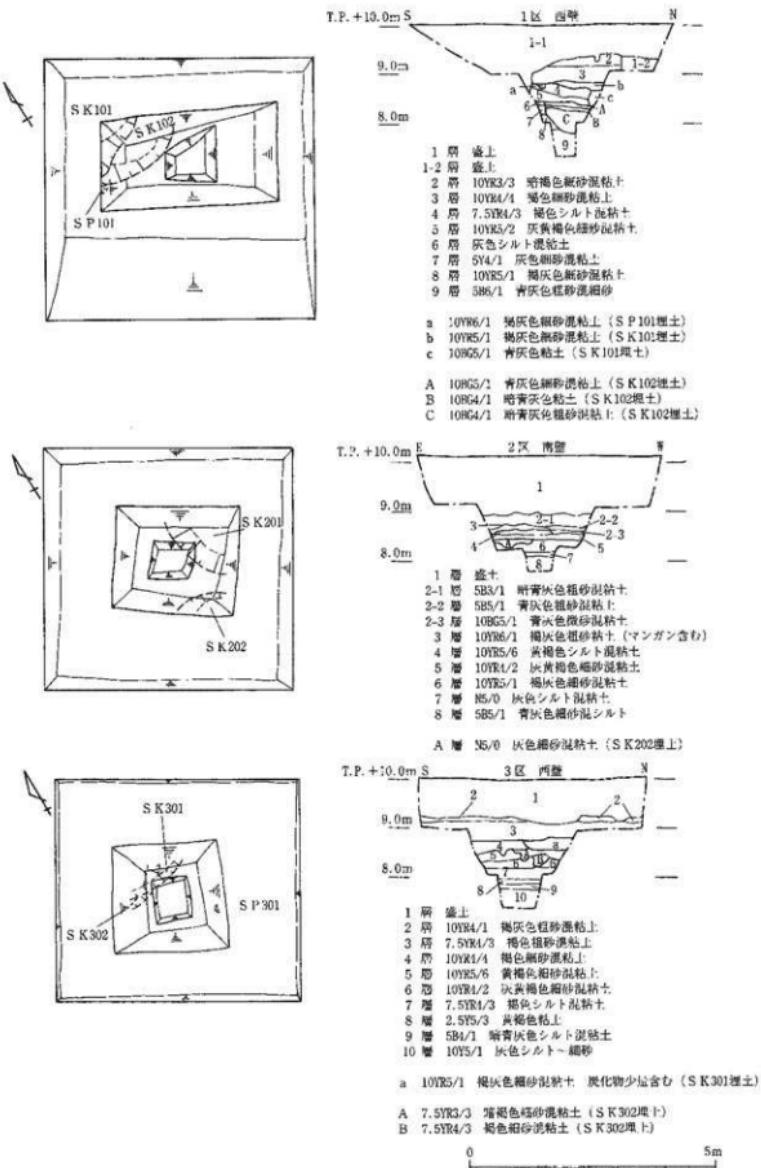
SK302は北側で検出した。遺構の北側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した現状の幅は、1.15m、深さ0.4mを測る。埋土は上から7.5YR3/3暗褐色細砂混粘土（炭化物含む）、7.5YR4/3褐色細砂混粘土で、遺構内の上層から須恵器が出土した。

SP301は南東側で検出した。遺構の東側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した現状の幅は、0.15m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/4褐色シルト混粘土で、遺物の出土はなかった。

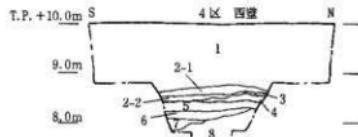
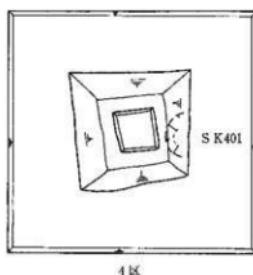
4区

地層

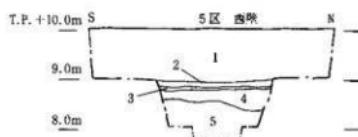
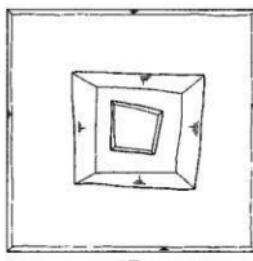
- 1層 盛土 層厚1.2m。現地表面の標高はT.P.+10.0m前後である。
- 2-1層 10YR3/1 黒褐色粗砂混粘土 層厚0.1~0.2m。旧耕作土。
- 2-2層 5B5/1 青灰色粗砂混粘土 層厚0.1m。
- 3層 10YR4/4 褐色細砂混粘土 層厚0.1m。
- 4層 10YR4/6 褐色粗砂混粘土 層厚0.15m。瓦や須恵器の破片含む。
- 5層 2.5Y5/4 黄褐色細砂混粘土 層厚0.15~0.2m。土師器の破片が出土している。上面はT.P.+8.4m前後で、遺構を検出した。
- 6層 10YR5/2 灰黄色細砂混粘土 層厚0.2m。
- 7層 10YR4/2 灰黄褐色細砂混粘土 層厚0.3m。
- 8層 10YR4/4 褐色シルト～細砂 層厚0.8m以上。この砂層は西側の3区で検出した砂層に対応し、遺物の出土はなかったがおそらく古墳時代中期頃の河川内の堆積であると思われる。



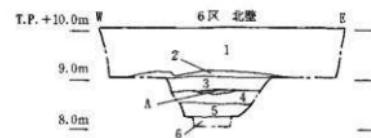
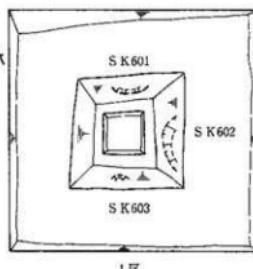
第9図 1区～3区平面面図 (S = 1 / 100)



- 1 層 盛土
- 2-1 層 10YR3/1 黒褐色細砂混粘土
- 2-2 層 5BS/1 青灰色粗砂混粘土
- 3 層 10YR4/4 黄褐色細砂混粘土
- 4 层 10YR4/6 黄褐色細砂混粘土
- 5 层 2.5YS/4 黄褐色細砂混粘土
- 6 层 10YR5/2 灰黄色細砂混粘土
- 7 层 10YR4/2 灰黄褐色細砂混粘土
- 8 层 10YR4/4 黄褐色シルト～細砂



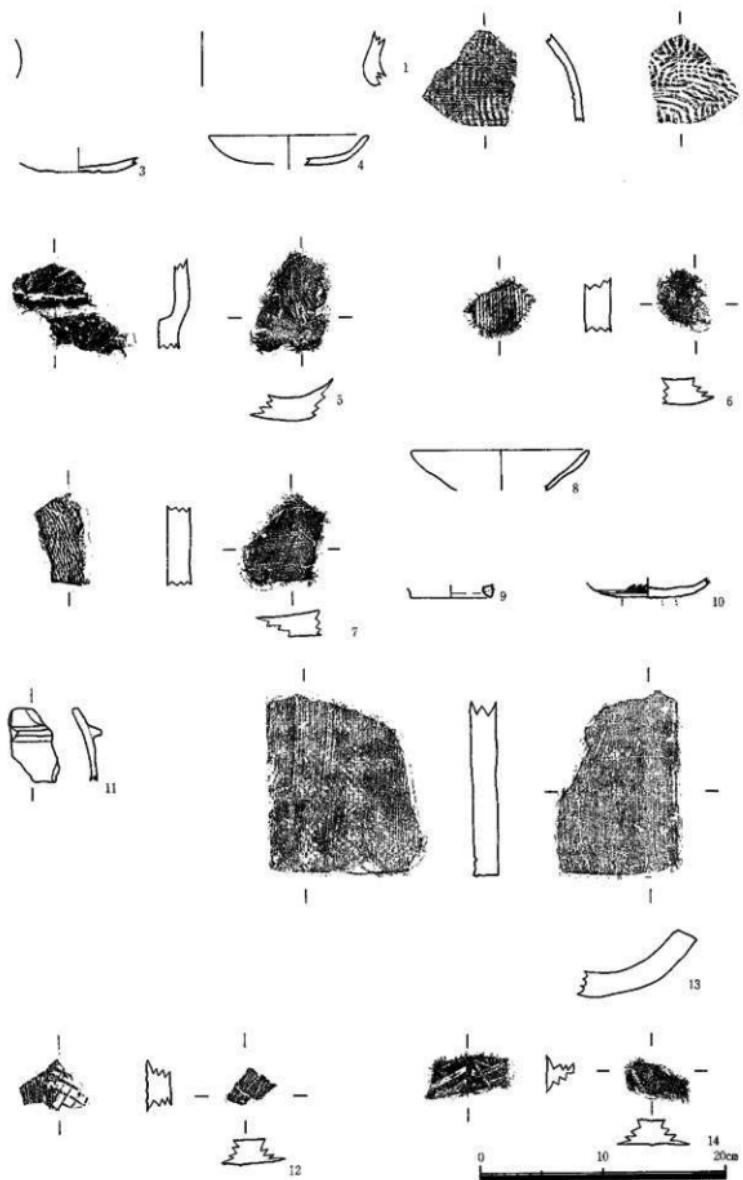
- 1 層 盛土
- 2 层 10YR5/1 黄褐色細砂混粘土
- 3 层 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混粘土
- 4 层 10YR4/4 黄褐色細砂混粘土
- 5 层 10YR2/3 黑褐色細泥粗砂



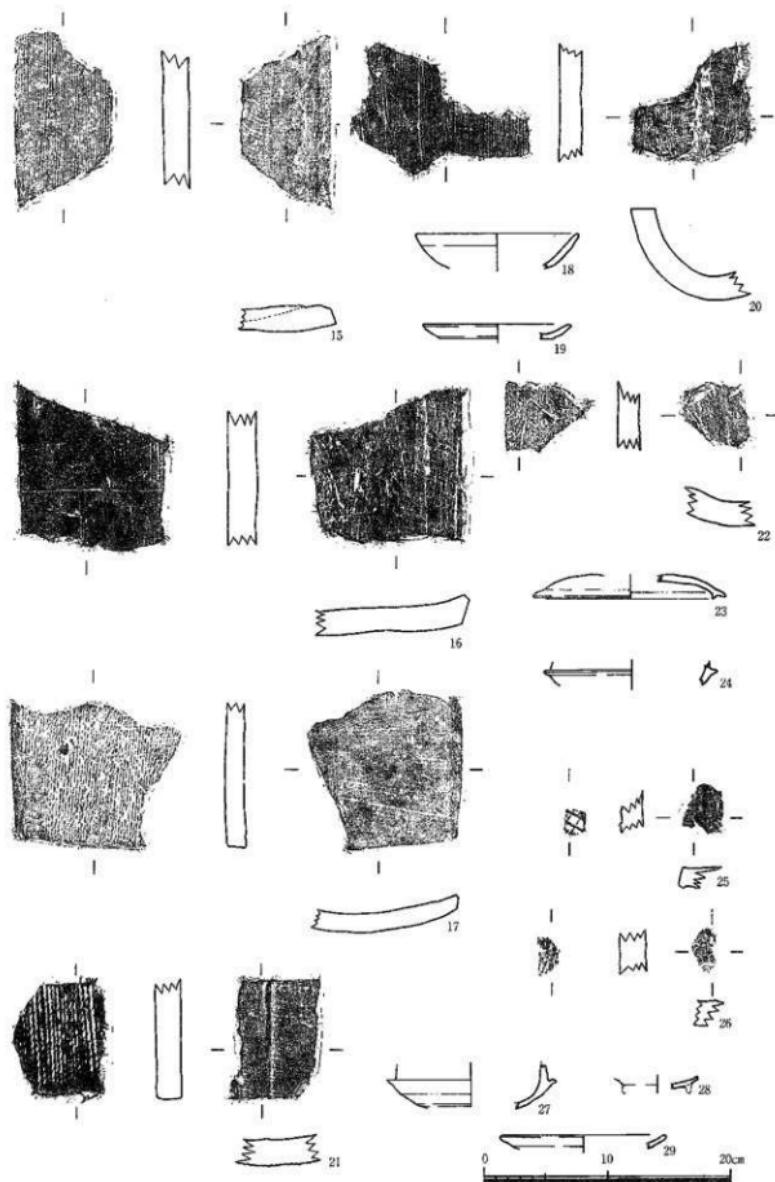
- 1 层 盛土
- 2 层 2.5Y4/1 黄褐色細砂混粘土上
- 3 层 10YR4/1 黄褐色細砂混粘土
- 4 层 10YR4/6 黄褐色細砂混粘土
- 5 层 7.5YR4/1 橙灰色細砂混粘土
- 6 层 10YR5/1 黄褐色細砂（粘性やや強い）



第10図 4区～6区平面面図 (S = 1 / 100)



第11図 出土遺物実測図 ($S = 1/4$)



第12図 出土遺物実測図 ($S = 1/4$)

検出遺構

盛土（厚み約1.2m）を機械掘削にて除去し、以下人力により調査を行った。調査の結果、5層上面で土坑1基（SK401）を検出した。

SK401は南東側で検出した。遺構の東側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した現状の幅は、0.9m、深さ0.7mを測る。埋土は10BG4/1暗青灰色粗砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

5区

地層

- 1層 盛土 層厚1.1m。現地表面の標高はT.P.+10.05m前後である。
2層 10YR5/1 黒灰色細砂混粘土 層厚0.1m。
3層 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混粘土 層厚0.1m。土師器の破片含む。
4層 10YR4/4 暗褐色細砂混粘土 層厚0.2~0.4m。須恵器の杯身含む古墳時代後期頃の遺物包含層。
5層 10YR2/3 黒褐色礫混粗砂 層厚0.8m以上。4区で検出した砂層に対応し、遺物の出土はなかつたがおそらく古墳時代中期頃の河川内の堆積であると思われる。

検出遺構

盛土（厚み約1.1m）を機械で掘削し、以下機械と人力の併用により調査を行った。調査の結果、3層と4層内からは遺物が出土した。しかし、この調査区では遺構の検出はなかった。

6区

地層

- 1層 盛土 層厚1.0m。現地表面の標高はT.P.+10.05m前後である。
2層 2.5Y4/1 黄褐色粗砂混粘土 層厚0.1m。旧耕作土
3層 10YR4/1 黒灰色細砂混粘土 層厚0.25m。瓦器の破片出土。
4層 10YR4/6 暗褐色細砂混粘土 層厚0.3m。層内に土師器の破片含む。上面の標高はT.P.+8.75m前後である。上面は土壤化しており、遺構を検出した。
5層 7.5YR4/1 黒灰色細砂混粘土 層厚0.3m。
6層 10YR5/1 黑灰色細砂（粘性やや強い）層厚0.2m以上。湧水かなり多い。5区で検出した砂層に対応し、遺物の出土はなかつたがおそらく古墳時代中期頃の河川内の堆積であると思われる。

検出遺構

盛土（厚み約1.0m）を機械で掘削し、以下機械と人力の併用により調査を行った。調査の結果、4層上面で土坑3基（SK601～SK603）を検出した。

4層上面検出遺構

SK601は北側で検出した。遺構の北側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した現状の幅は0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は10Y5/1灰色シルト混粘土で、遺物の出土はなかった。

SK602は東側で検出した。遺構の東側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した現状の幅は1.15m、深さ0.2mを測る。埋土は5Y5/1灰色細砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

SK603は南側で検出した。遺構の南側が調査区外に至るため規模は不明である。検出した現状の幅は0.35m、深さ0.1mを測る。埋土は10Y5/1灰色粘土で、遺物の出土はなかった。

5. 出土遺物

1区

3層からは土師器の破片や瓦器の破片が出土した。また、5層からも土師器の破片、瓦の破片が出土したが、図化できなかった。

SK102の最下層からは、須恵器や土師器の破片が少量出土し、このうち図化したものは1～3である。1は須恵器の壺、2は須恵器の甕、3は須恵器の杯である。2の外側は平行タタキのち回転ハケ目、

内面には同心円タタキを施す。

2区

3層内からは瓦器、土師器、須恵器の破片が少量出土したが、図化は不可能であった。上面は上塗化しているが、造構の検出はなかった。しかし周辺に造構が存在している可能性が考えられる。

5層内からは瓦器および黒色土器の破片が少量出土した。この内凹化したのは瓦器の皿4である。3層同様上面からの造構の検出はなかったが、周辺に造構が存在している可能性がある。

6層内には丸瓦や平瓦の破片が含まれておらず、整地層の可能性がある。この層内からは瓦5～7が出土している。5は丸瓦で、凸面はナデ、凹面は布目痕を施す。6の凸面は縄目タタキ、凹面は布目痕を施す。7の凸面は縄目タタキ、凹面は布目痕を施す。

3区

3層内には瓦・土師器・瓦器の破片が多く含まれていることから、中世以前の整地した地層とおもわれる。この層内からは8～17が出土している。8は土師器の杯の口縁部で、9は土師器の杯の高台部である。10は須恵器の高杯で、外面に波状文を施しており、6世紀後半頃のものと思われる。11は瓦質の羽釜である。12～17は瓦である。12・13は凸面に格子タタキのちハケを施している。14の凸面には有輪の綾杉タタキを施し、凹面は布目痕がある。同じタタキを施す瓦は東郷磨寺などで出土しており、7世紀中頃のものと思われる。15の凸面はハケ、凹面は布目痕を施す。16の凸面は縄目タタキ後ナデ、凹面は布目痕を施す。17の凸面は縄目タタキ、凹面は布目痕を施す。

4層は土師器・須恵器・瓦の破片を多く含む奈良時代頃に整地した地層と思われる。この層内からは18～21が出土している。18は土師器の杯の口縁部、19は土師器の皿の口縁部である。20は丸瓦で凸面ハケのちナデ、凹面布目痕を施す。21は瓦で、凸面縄目タタキ、凹面布目痕を施す。

S K 301からは22が出土した。22は瓦で、凸面縄目タタキ、凹面布目痕を施す。

S K 302からは23が出土した。23は須恵器の杯蓋で、短いかえりがつく。内外面ともに回転ナデである。時期は7世紀中頃に比定される。

4区

4層は土師器・須恵器・瓦器を含む地層である。この層内からは24～26が出土している。24は須恵器の杯で、回転ナデを施す。25は瓦で、凸面格子タタキ、凹面布目痕を施す。26は瓦で、凸面縄目タタキ、凹面布目痕を施す。

5区

3層からは土師器の破片が少量出土した。出土した遺物は破片であるため図化は不可能であった。

4層からは土師器や須恵器の破片が少量出土した。このうち図化したのは須恵器27である。27は杯身である。

6区

3層内からは瓦器の破片28が出土した。28は瓦器碗の高台部で、高台は破損してなくなっているが、太目の粘土縫が付く高台になるとおもわれる。時期は平安時代後期と思われる。

4層内からは土師器の破片が少量出土した。そのうち図化したのは土師器29である。29は皿の口縁部である。

出土遺物観察表

遺物番号 国版番号	出土地名	器種	法量(cm)	形態・質感	色調	胎土	焼成度	備考
1 SK102	東慈器 安 口縁部			上外方に伸びる口縁部。口縁端部は欠損している。 内外面同軸ナゲ。	外面5.0/灰色 内面5.0/灰色	1~4mm程度の 砂粒含む	良好	
2 SK102	東慈器 安 外縁			内面同心円タキ。外周平行タキのちナゲ。	外面5.0/灰白色 内面5.0/灰白色	1~2mm程度の 砂粒含む	良好	
3 SK102	東慈器 安 底部			内面凹凸ナゲ。外周凹凸ハラケズリ。	外面5.0/灰色 内面5.0/灰色	1~4mm程度の 砂粒含む	良好	
4 2区 5層	丸器 蓋 口縁部		口径13.4 高さ2.4	ゆるやかに外へ開く口縁部。器部は丸く終わる。	外面5.0/灰色 内面5.0/灰色	1mm程度の砂粒 含む	良好	
5 丸		厚み1.6		内面ナゲ。凹面布目底。玉縁は右側、左側とともにナ ゲ。	凸面5.0/灰白色 凹面5.0/灰白色	1~3mm程度の 砂粒含む	良好	
6 丸		厚み2.1		凸面幾何タキ。凹面布目底。	凸面5.0/灰白色 凹面5.0/灰白色	1~2mm程度の 砂粒含む	良好	
7 丸		厚み1.8		凸面幾何タキ。凹面布目底。	凸面5.0/灰白色 凹面5.0/灰白色	3mm程度の砂粒 含む	良好	
8 3区 3層	土器器 軸 口縁部	口径14.1		凸面内外面横ナゲ。体部内外面ナゲ。	外面5.0/6/6橙色 内面5.0/6/6橙色	1mm程度の砂粒 含む	良好	
9 3区 3層	土器器 軸 高台部	高台径6.4		ハの字に開く高台部。内面ナゲ。外周側ナゲ。	外面5.0/6/6橙色 内面5.0/6/6橙色	1~3mm程度の 砂粒含む	良好	
10 3区 3層	土器器 高台部			外底に波状文を施す。外周面凹凸ナゲ。脚部のスカシ は三方にあると思われる。	外面5.0/6/6橙色 内面5.0/6/6灰オーライ色	3mm程度の砂粒 含む	良好	
11 3区 3層	瓦 瓦底 口縁部			凸面内外面横ナゲ。鋸歯横ナゲ。	外面5.0/6/6橙色 内面5.0/6/6灰白色	1mm程度の砂粒 含む	良好	
12 丸		厚み2.0		凸面横子目タキのち。内面布目底。	凸面5.0/6/6橙色 凹面5.0/6/6灰黑色	1mm程度の砂粒 含む	良好	
13 丸		厚み2.1		凸面横子目タキのちハケ。内面布目底。	凸面5.0/6/6橙色 凹面5.0/6/6灰黑色	2mm程度の砂粒 含む	良好	
14 丸		厚み2.1		凸面有輪紋形タキ。内面布目底。	凸面5.0/6/6橙色 凹面5.0/6/6灰白色	1~2mm程度の 砂粒含む	良好	
15 丸		厚み2.1		凸面ハケ。凹面布目底。	凸面5.0/6/6灰黄色 凹面5.0/6/6灰白色	1~4mm程度の 砂粒含む	良好	
16 丸		厚み2.1		凸面幾何タキのちナゲ。凹面布目底。	凸面5.0/6/6灰黄色 凹面5.0/6/6灰白色	2~3mm程度の 砂粒含む	良好	
17 丸		厚み1.5		凸面幾何タキ。凹面布目底。	凸面5.0/6/6灰白色 凹面5.0/6/6灰黄色	3mm程度の砂粒 含む	良好	
18 4区 4層	土器器 軸 口縁部	口径13.0		凸面横ナゲ。体部内外面ナゲ。	外面5.0/6/6橙色 内面5.0/6/6橙色	1~2mm程度の 砂粒含む	良好	
19 3区 4層	土器器 軸 口縁部	口径10.6		平らな底から外方へ作るU溝部。U溝部内外面横 ナゲ。	外面5.0/6/6橙色 内面5.0/6/6橙色	1mm程度の砂粒 含む	良好	
20 — —	丸瓦	厚み1.8		凸面ハケのちナゲ。凹面布目底。	凸面5.0/1灰白色 凹面5.0/1灰白色	2mm程度の砂粒 含む	良好	

出土遺物観察表

遺物番号 同族骨等	出土区 層	種 類	法 面 (cm)	形 態・構 造	色 調	胎 土	施 成	備 考
21 十 +	3区 4層	瓦	厚み2.0	凸面鏡目タキ。凹面非目底。	凸面7.5W5/6暗灰色 凹面2.0黑色	1~2mm程度の 砂粒含む	良好	
22	3区 SK301	瓦	厚み1.8	凸面鏡目タキ。凹面非目底。	凸面7.5W5/6暗褐色 凹面10W7/1灰白色	1mm程度の砂粒 含む	良好	
23	3区 SK302	風呂敷 桶身 口縁部	口径15.2	かえらは内側に底きとぎみに丸く終わる。内外皆 灰黒土。外側に自然輪付帯	外周10W3/1オリーブ色 内周V7.0灰白色	2~3mm程度の 砂粒含む	良好	
24	4区 4層	風呂敷 桶 受盤	受盤径14.0	受盤は水平にのげる。内外皆内板ナゲ。	外周5W6/1灰色 内周5W6/1灰色	1~2mm程度の 砂粒含む	良好	
25 十 一	4区 4層	瓦	厚み1.9	凸面鏡子タキ。凹面非目底。	凸面7.5W8/2灰白色 凹面7.5W8/2灰白色	1mm程度の砂粒 含む	良好	
26	4区 4層	瓦	厚み2.1	凸面鏡目タキ。凹面非目底。	凸面5.5灰黑色 凹面5.5灰黑色	1~3mm程度の 砂粒含む	良好	
27	5区 4層	風呂敷 桶身 たらあが りー桶板	受盤径13.7	受盤は水平にのげる。たらあがりー受盤外曲変板ナゲ、 桶身外曲面軽いハケグリ。内面黒板ナゲ。	外周10W5/1灰色 内周7.0灰白色	1~3mm程度の 砂粒含む	良好	
28	6区 3層	瓦器 桶 高台器		内面ミサキ。外面ナゲ。	外周5.5灰黑色 内周5.5灰黑色	1mm程度の砂粒 含む	良好	
29	6区 4層	上部器 瓦 口縁部	口径13.0	口縁部は丸く終わる。片外周薄ナゲ。	外周5W7/6褐色 内周7.5W6/6灰黃褐色	1mm程度の砂粒 含む	良好	

5.まとめ

今回の調査では、調査区の全体を通して古墳時代中期以前に堆積したと推定される砂を確認したことから、この地は河川もしくは河川の洪水による氾濫原であった可能性が高い。この河川が埋没した後、比較的安定した土地となるよう、5区から出土した須恵器から、6世紀初頭頃に生活を始めると思われる。以後3区および4区で検出した土師器、須恵器、瓦器、瓦の破片を含む地層が存在していることや、3区で検出した遺構内からは7世紀中頃の須恵器が出土していることから、今回の調査地には6世紀初頭頃～中世まで集落が存在していた可能性が考えられる。

今回の調査地付近の小字「古市」俗称「法着寺（宝着寺・宝積寺）」という地点からは、飛鳥時代～奈良時代の軒丸瓦と軒平瓦などとともに礎石が出土したと八尾市史に記載されており、調査地近辺は以前より渋川廃寺の推定地とされている。周辺では、財団法人八尾市文化財調査研究会（以下同研究会と記載する）がJR線路の北側の渋川廃寺遺跡内で調査を行っており、奈良時代の寺域に関連した遺構や遺物を検出している（青木勘時1990）。同研究会では、北側の久宝寺遺跡第7次調査を行なっており、古墳時代後期と奈良時代の遺物を包含する層を確認している。また、西側に隣接している久宝寺遺跡第29次調査では、奈良時代の井戸を検出している（坪田真一2001）。のことから、渋川廃寺の規模や存続していた時期などには不明な点があるが、同時代の寺院が存在していたと推測できる。

同研究会では南側に隣接している跡部遺跡でも調査を行っており、特に第5次調査では、弥生時代の銅鐸が埋納されたままの状態で出土し、弥生時代の集落が存在していることが明らかになっている。また、この調査では、古墳時代前期や平安時代の遺物も出土していることから同時期の集落の存在が明らかになっていた（安井良三1990）。

これらのことから、今回の調査地から南側には弥生時代～平安時代の集落が、今回の調査地を含め北西側には古墳時代後期～中世に至るまでの集落が存在していると推定される。

謝辞

今回の調査では、財団法人八尾市文化財調査研究会の方々からご協力・ご教示いただいた。記して謝意を表わします。

(西村公助)

【参考文献】

- 1988『八尾市史』(前近代)本文編 八尾市役所
- 青木勘時1990「23.渋川廃寺SKT90-1」「平成元年度財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告」財団法人八尾市文化財調査研究会報告28 財団法人八尾市文化財調査研究会
- 安井良三1990「跡部遺跡第5次調査報告書」財団法人八尾市文化財調査研究会報告30 財団法人八尾市文化財調査研究会
- 坪田真一2001年「久宝寺遺跡第29次」「平成12年度 財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 消斎 1995 「東郷廃寺発掘調査報告」「八尾市文化財紀要7」 八尾市教育委員会文化財課
- 原田昌則1991「久宝寺遺跡第7次調査(KH90-7)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」財団法人八尾市文化財調査研究会報告32 財団法人八尾市文化財調査研究会

図版一 史跡心合寺山古墳 新池堤体改修工事に伴う立会調査（平成十一年度）



調査地北東(墳丘)側より



調査地南より



複弁八葉蓮華文軒丸瓦

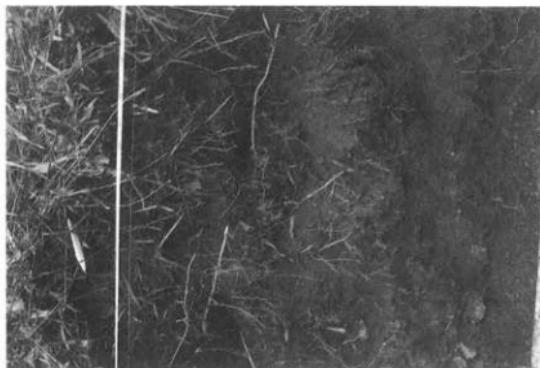
図版二 史跡心合寺山古墳新池堤体改修工事に伴う立会調査（平成十二年度）



調査地東(壙丘側)より



調査状況東より



切土面土層状況

図版三 淀川廢寺遺跡
（2000—364）の調査



1区周辺(西から)



1区全景(西から)



1区西壁(東から)

図版四 沢川廃寺遺跡（2000-364）の調査



2区周辺(西から)



2区全景(西から)



2区南壁(北から)

図版五 渋川廃寺遺跡
(2000—364) の調査



3区周辺(西から)



3区全景(西から)



3区西壁(東から)

図版六 淀川廃寺遺跡
（2000年364）の調査



4区周辺(南西から)



4区全景(西から)



4区西壁(東から)

図版七 渋川廃寺遺跡
(2000-364) の調査



5区周辺(東から)



5区全景(東から)



5区西壁(東から)

図版八 淀川廃寺遺跡
(2000
—
364)
の調査



6区周辺(東から)



6区全景(東から)



6区北壁(南から)

圖版九 淀川廢寺遺跡
(2000—364) 出土遺物

5



6



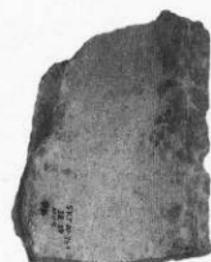
7



12



図版十 渋川廃寺遺跡
(2000—364) 出土遺物



13



14



15



16

圖版十一 淀川廢寺遺跡
(2000—364) 出土遺物

17



20



21



25



報告書抄録

あたりがな	やおしないいせきへいせい13ねんどはくつちょうさほうこくしょⅡ						
書名	八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅱ						
副書名	平成12・13年度公共事業						
巻次							
シリーズ名	八尾市文化財調査報告						
シリーズ番号	47						
編著者名	吉田野乃・西村公助						
編集機関	八尾市教育委員会						
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 ☎0729-91-3881						
発行年月日	西暦2002年3月31日						
所取遺跡名	所	在	地	コ	一	下	調査原因
	市町村	遺跡番号		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)
心合寺山古墳	八尾市大竹5丁目地内	27212		34 38 10	135 38 35	2001.11.13-14	85
心合寺山古墳	八尾市大竹5丁目地内	27212		34 38 12	135 38 35	2002.12.22-26	35
淡川庵寺遺跡	八尾市春日町1丁目地内	27212		34 36 57	135 35 38	2000.11.09～ 2000.11.28	150
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
心合寺山古墳	古墳	古墳時代・奈良時代	新池旧堤体	軒丸瓦			
心合寺山古墳	古墳	古墳時代・奈良時代	新池旧堤体	瓦			
淡川庵寺遺跡	寺院	奈良時代	土坑	上部器・須恵器・瓦			

八尾市文化財調査報告47
平成11～13年度公共事業

八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅱ

発行日 2002年3月

編集・発行 八尾市教育委員会

〒581-0003 八尾市本町1-1-1

TEL(0729)24-8555 (直通)

印 刷 (株)近畿印刷センター

